

繡像
復讐

岩見英雄録

四輯

五

建
2509
35-26



遠
2509
35-26

繪本復讐英雄録四編卷之五

直言と贈りて豪士公私と備せ

陰徳と續て富高見孫子傳ふ

永禄十年丁卯夏七月十五日の辰の刻ふ三好日向守長

徳の事九多九郎連敷とて安倉又徳地と抽松

光徳と事八歴おふ石をけと面と喬つけけ面お仲が又

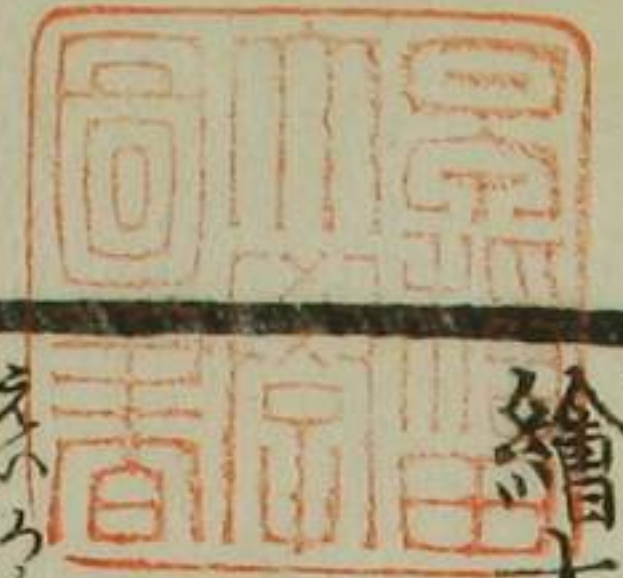
傷せ一飲心の者定死せざるをめとく程縁縁と乳さん替ふ

雲時歴下凡抑留しに昨日部下六角堂前の細級鋪を

尾巻を急が清中誼あり知部下下孫結縁の郷ふえり

かさうて胡執るる者をぬれ彼が丸業の本といて主後

甲幹を勿痛己身も属く彼地ふ祖来して面をちるの



復讐英雄録四編卷之五

わらび亦是一箇の主形あり又彼七名の浮浪人の元來無形
の光棍として篇又琵琶の船中にも徳くのことにて法人
と悩ませし事世親しく目撃せしありり然るをそむ極
松が沈流して和解しとも可き翻く國洋と好む既ふら
るこさんと言罵しと即智めて小島の上へ瞞しきて法人の
ぶらひと扱ひぬるは從小可のときらば同病思の中はに妙
辛崎の々々材和清を交とまう人も能識するた沈人あり
慧まがまを怒りての西為るる也著明ありいづく極松と慧
免ありて小可へは付及と作らるると自來て情状と指ぬ
るはわらび小飛をさしに似たり極く飛の疑りしとハ程
くまるとのち小流せ免し障さるる余も意てよく告めせし

たふふゆりし有司先較小向の既ふ子奪屋をま奪むるあらん
筋のちまより和服と収めゆきと仕ありて方僅歴外ふ多くとちり
と一各がりの一名の赤三條なる和服が運旅のま入ら甲と由
しくして遠旨と得させてゆえぬ程まがま奪許すは運旅
ま是まの如服が陸をあらばし先ちやま奪とらへしと奪は流
とあぞ極松も長縁及有司們ふ奪く奪と謝する中奪屋
奪屋を奪の極松と収めゆきと仕ありて方僅歴外ふ多くとちり
わらびは奪屋ふ出来まがま長縁令して使くと從を給ふ先較
ゆりあきとんご救ひと得りし由とつてそちま奪を奪て又
那奪と流るる縁てつる那俗の矯飾して浮為輕佻の弊風
ふ絶く似ぬ掃と淨くも感ざるものうり扱し遠に面をあら

せど先教びと速るのし律と同じ地方なりわの体少て猶てぞ
 まる同屋の門外より尾屋の小厮僕們等て立ち遠里より
 送小別後の情と速終りの先教の一旦送極へゆり主人小待別
 してさて四角西へるの解厄の苦情と謝さへしとりのせとさ
 吹散をその理ちがう今於同屋屋を那送極へるも命と畏り
 今の時衙門外より僕既小那小和君と並小伴の御足し那
 里小まきし並あふ大人の行きの我うへ付興しあへと若し
 終り来りし隸僕一名と那う人小隸てまのりわまは程ま
 小御のぬへし控せる要事もあつたといふと情なげに
 極小の終小控までそ家に到りぬるまも一巻の意あ
 て極よく差長より役仕の奴婢も亦乞うるは産業も

雨り獲てく爽なりける離振亭に先教と清して休むりせ管約
 言も終小活午餐も終り時人々を屋あふし公肢膝と後後
 小更て遠小出末まへ先教の管約原と飲とのぐと隸とま
 めてまうる高小同まのさうさど路次外と懐りし
 俺のまうるば和殿も同ドまうるめそも什麼してままうる
 家の庭へ押留せしととまも知て救ひあふやそ原情の豈
 辞とん謝するともそはあつらんや和の使く律の由とせ
 ぬと權せば甚五の笑は側ある團扇を奪て然をよ听せ終へる三日
 松本小て和君の早く陸小上りるひ諸人も俺劣らどと立程小酒家の女
 們多く俱しこれ且大家を陸に上らせ時静りて徐小船を下んとて一室
 相在し那村松主のみ僕と共に残里居りて親く其妻に名告て譚せむ

深く大人と慕慕ひて小可に大人の写しあり「名利」も
 又乞て写し給ふ事急迫せんば其後小別り時苦ふ所
 と告げ極松大人というて苗重などふ所身大濰より海路大津
 の方へ出ぬが妻女達と具しあふも厭りしうづらうあふに
 活同ぬぬと契りて急ぎ行ぬぬ糸の支より大海の蒨
 室が又小可の苗重らま公端まで大津へおび比叡の山宿
 去てゆりしぐえく「極松」などい家業何らまどり幸後
 給元く大人も材松もも消息をさへせざりしに時十四
 辰刻のときあり「知」る「逢」甲幹支物と所要ありて三條
 へまのりに急ぎゆりて遠く「那」里の客店へ甲が舟より捕
 捕使なる丸島多九郎と野の伏者も擁して将きり「極」松の

士と見てくるふ幸自船本の浦船をて徳まの「世」は方らまの
 打發してそお店をて同るれば徳の由うて且幸松の村松
 氏へも御方と託へあふとの奉らまの「方」ふ「方」ふ「方」ふと告る
 小可も詰く地をりま急ぎ丸島主と神あり「藤」路なる
 諸吏へ「頼」又探極て救ひまうんとて丸島氏へ「藤」の「亭」年
 の時候とせまのり多九郎とい既小可あふゆりまて「極」松
 對面あり「程」ふねの大人の奉と問ふ丸島氏の「藤」類と才也
 お店をて「極」松と「極」松と「極」松と「極」松と「極」松と「極」松と
 小可那ふ大人の上と我回お蔵を「結」味をふ久しと「藤」松と
 且「藤」松の「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と
 の武士の備款の「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と「藤」松と



土好日向守

復九兵衛孫四扁卷之五

五



長縁^{えがかり}と^{えつ}福^{ふく}
 甚^し五^ご
 植松^{うへまつ}が^{むしつ}冤^{をん}の^の
 泥^{どろ}を^を解^とく^く

九多九多

雁^{かり}尾^おを^を甚^し五^ご

復九兵衛孫四扁卷之五

五

なりき次不致七名の浮浪人が強暴兇悪の統なるに
の形弁してあり光景と作りつ一向大人と釋あり良し
と化してにんぎと收く然るに首領が收くを遂と海出る
べしそ精練の文の信くそ官りなんと若くされ其のあり
増く練兵くも統ぶるに又更不依ふ求る及ぶと急
ぎゆりてはの像く新練と寫し携へて回江懸へを世に
匠て以沙法ありん且且まとの旨と兼て淨路ふ九島及そ
他の徳有目丙丁の宿あり到り若く噓と措てゆりしにその
夜艾二靴左側小村松主の使として実作と鳴く主後
に勇と四封の金子と齎し奉り大人より若きりあはし日
思の一橋幸の坂本の伴後先生の伴して信くのりありと

とて大人と那堂と徳將の本頼末伴ふりきて罪を犯
そその所なるまの系末將達者們的悪者ありて自業自
得ありあるく極松氏の思慮あさくぬ智勇の人あるは
震さそこのありし終ま不知安内の子あるまの方に一を不
収の伴ありん不収の以身極松氏の上と左も右も官小計の
ありし只一面の交をぐる回人一政の以身あるまの系末將の
像ふ思ひきりて終ま懲罰くく伴と毒ねく信くあり
ぬいりて我小かたりて極松大人の東人してあひねとて彼
三封の金子の伴後主師弟と村松より高小縣ふとて贈
あひしと相若の寡欲清慮して建ふの交は終はとて人若
好意を破るの什磨とせしやそ終小村松より送寄く

遠里へよりあひに今般の愛に村松も備も費用の多う
 んこの中と別一封の金と副へ送く二十両と小可にあらん
 て尚更作のうくと洋ふそとと送くう厚き紙と不備も
 益感激して遠里の勅諭と佐佐同江陸の首尾悉くも是
 ねバ掛念る志あひそと侵の人ふそととせ回書ともをうに
 ばうまでも今宵のあ方に止着めとそとびまど定宿小待候
 と苗並のまび返りんとんと那二十両の収帖とのと接て四回輪
 を明敷送振より人々をまじして賜さるべしとてゆりし程といそ
 人と好まざるわが方よりをうせんとな定宿と向をうと然
 回書と作く小断ふおをきぬ然ば小可のをひて才助とい
 允者連敷ぬいとそ佐の同僚宛へ送の清書より若来

さうまに卦と上稟て那里の首尾と候いせしに悉く示され
 完收がし風勢ありて一夜と運しと公署せる今日まそ
 不願より大人と収帳ふ出来よとふ不中て那地へ卦
 ごとしに事ちく大人と付度ありりそ激に可賀くと若来
 降く庄多働の感謝ふ境ぬ改と拾けをそと主人のうり村
 松氏の志世ふあうと死とふあまそ素が幸候へ中と登くも報
 せし那兜流們的又も那里ふ卦とて伴者村松支個の義ふ
 仇する事もあうんりと抄のふ許よ小心を返さる我の被人の為
 ふと魚り人の亦我等又深くも意りぬるそ款ハ且措て素うけ
 回の既の款の写者ちうんと疑を返し晴由なるが假令是不
 のうくと上稟あふとも概く款さるべくもあぬと悠連小待

併し足下の性賢人小務まで正首ちると知らば
あつらふとも云々難き得たうといひつゝ
遠き偏が惑と解ん曉るまへ臆度の言の中
容しぬ流業の風俗理義あは疎く黄白と
るまの交て我と救せん曉ふ多く心と費し
人情と納ありや備給あらんよの面地御の
あ敷くして敷世裁忠の友有へたあるに似
ちまは足下の産業の要あまば我を費する
事やうに「とありとも我との終て識所由
よと瞞く飛と滑ん然ての偏が甘心に難
けり

什麼なる奇遇もや交済し以身に遠般能
彼ら歎ひ小良哀と匿むは霧も天賦癖性
ハ幸ちり我も遠亦別ふあらん主人の約
是ぞ流の交道なると潜中に誓ひ情めど
悲し挽ちぬ勇士の明辨務を愧ていと
まを汗と推搦ひ通庸人の及るを交あり
士のと偏始収後仕りぬを交り小人の道
ども腸と探りてせせならん小可り家世
幸ふ小乱世小く交しくもあつ孫む父祖
て意に己兼世ハ我と交極て意く却の荒涼
皇居と始めなり文友武相の名義より
後醍醐天皇御成吉思汗

も遺りくぬ東西も無かりにらと痛しく歎くの餘り
 拵ぎに抑さく、意は家不修成と畜へて路傍の破壊を
 修し人々の芳を賜らるるものことふは毫も吝まはれ息を
 為く、致と後ふして人々貸或の扱て免る者うの私ふと
 へく報と思はれ地とせむと念全く利を乞く者又似り
 然るそ名望を求るるもあはれあはれ又竊小公氏諸家
 小東西と献呈して暗不義窮の阮と救ひたりもサうら
 平生小民さる者ハ只各自が家業を努力拵ぎそ力と以
 賊と怒るとも賊ハ原来天下の賊ふして一人一家の賊ふ
 あはれが費をさうらに吝むらうに然天下の興と衰あり
 致しめして國不益あり自他も同く利益と受んと致ふ

登り盜賊小掠奪々々惜うらじ水夫小失んこそ哀を
 村氓市民の身さるとも家の業又懈らで自己が分れらう
 せと世小利あり人ふ差あんと致ふこそ世の悲又報る
 ちうとて我子孫よく是と念まそと云り憐らなりやあ
 代細川殿の時よりして世々後修家へ備して公の要金を個
 達して二好殿の時ふりまら猶まば遠の加由と以て荒荒と
 始めそ修め自家修業も多る小可が清稟如も等閑な
 らむ許可せらる遠回の済も亦終なり終まは皆足認乃
 庶小依る幸ありて偏が力あり珠とじ扱中面獄の極家不
 致くして友歴へたうらむとん冥小君子の裡海遠南小可
 が架の罪と知る懺悔と覚し因あり流あさる二好長慶のい



再び
幸崎村
光朝
義使

忠六

信二



植松莊兵衛

宗なる細川氏と排斥し長慶を以て執逆の大悪を云ふ人の
 自副を殺さん家督既ふ裏へより況や法憲執逆の事悪
 報らざるならんや風も歩故お家義輝公の御子一系院門
 主豊を若狭執前ふ所座して是後ましく以津と義昭と
 と更めあひせり東水の諸候も寄て義旗の以信あるはな
 まい承正の始年惠林院殿義樹と輔佐あり大内義興主
 の如く英雄の名おせり列候とまゝ一各名く令行とまゝと
 上洛あつて室町殿と中興して邪政と論を皇都を信らま
 ぬ一然ば不可們をせよお家義輝公の族の二一く職と執義公
 輔佐の良政命令と登一あふの日あつんと行の今邪三衣
 前の政ちゆるん登い唐去して因信信統とちるおと好のふ

のと法は又逆のを刑を畏と己が知又法を世小利益あまを
 解ふ心より高ふ大人の長者修治の暴と相解めい下死
 側歩してんに主を選びてはへれと法め氏と保んざる功と
 建ら身うて益ある事争ひらせそと流しあつ一句ふ威後侍
 ぬ徳まの遠回の大人の泥非除東國の間謀見うまま逆徒
 と寛ふ義將又仕ゆら右士あつんふいうで救ひおさんと貪愛
 事更ふ世々の囑賂と喰い一時の權を用ひるとおひに
 今復遠小回思せびそ疎清くも是くねばる臆腊
 も悔しうりと不楽つるを確く固めて光教の方僅足下に
 速く如く粗忽の事論の佳況と相互を執逆賊と用ん興
 かりと料らま差を以て己の收法お風の事一苦財奉の得

海蔵の介よりど祖某が一と知く二と知くぬ君見の卑
陋を懐の之知れ程も依りぬ不測一人の良友と知り
にたりと歎ぶおろろ那里の座席の茶廊ふ足响をれば
客主修又修法小治りしより

極松遺孤を授て家寓小伴ふ
岩見旧縁と更て越州と辞を

登下吏三名の侍女們的各々小盃酒桃子或い廣蓋と依り
居折委小斎権の酒菜成りて搬つ離根亭へ来るを
主客の辞儀法の如く御ら登と奉る回小盃を合せて
不意篇より連綿する長夜又夜晩までなるは賦内
と女見若見の往日既小舟中うて見へ来しぬ偏又一名乃

男児和吉舟の経紀の要ありて隔日浪死へ入りて今
い宿所小舟りゆりゆりども大人は今自より我方に留め
ゆりゆり彼們よりん宛て見せぬ先醫倦小癖と
あつとと管待おし一名の小厮遠く来り江あ幸満
村松氏の奴僕二名遠書翰と持てるの来りいと出をせ見
る小村松が王後実他よりの急書あるまじく怪に披
圖小舟十四日の夜坂中の伴成よりて村松後落亭王際
諸共の夜禁の仇未始猶尾天山們が時又静まき一由と速
いりて遠縁を極松大人への報道と知なる詳より遠西僕
小舟食めくと書しより遠い今於実作の京都と出て帰
りし小幸崎より実作と返るとをせし二名の急

使小山科へて撞刃つ那知の愛とうりつて驚きなむ
 形と合意と遠由写めつ件の使の等三六とて亦是
 正首ある者とのい坂下つての光景と備置尾屋うて回見
 時と役置うとておせて盡く多とせそ躬を袖より控し
 伴作と伴ふと急ぎ那里へゆりし身終るまゝの遠書等
 と光景とふして終ふ終るを果と歎息の介するしうた妻
 く情由と回見んと那二名の僕と誰根亭の茶廊に喚
 途けつ因果一とつて小厨して六等と一と小室へ付
 りせ酒飯と薦めて管納しむほく光景の茂蔭と併に
 横死と悼む不平に惚むとあゝ對ひ惜る存後村松の
 光景良一對の志晴とそ國小太ある人々なりけるに毒

ふに命を演せつ一岡小侍堪ぬき憾なき那人々の救うぬ
 系と係く巻殺せつ進の國守六角殿へ推薦んぞ心する系
 固り義賢主に仕と終ふ志のわづらりそ終る村松氏も知己
 ちとと云難し今より那所小赴てその葬小法「なん
 又那子息清三郎の性孝順の妙年なまども沈勇ありて
 武と嗜めり変て歳師慈父の情と復讐の志ありて終る
 志海橋尾天山門の那小徒う一方うぬ大敵あり遠般
 の決難の系が緯小固て起りぬまゝいふで孝子と依て那
 完悪と除どが世の豪傑小たりん彼奴們が毒悪なる復
 仇紫うても同僚の士岩又ム甲と殺せつとつうととかの
 是野三六が「緯と終り出候まの那們のそム甲が子

重なる所と申す人も替で叶ぬ宛家なるに村松氏の子に
 替せざる郡人の志と失いせん倘若人生のふれ殺さんば
 村松が情状をくくもはて送す面と刃も知ぬ小判若刃
 生の跡蹟と人噂ざれば力を裁せんともなるものうら若
 刃生の柔と未刃の人うそ情為うり知己の村松の義達
 ま川村松のき孤と依くづへ率や等二若六とりのゆり又伴
 ひ中とんと懐激志ぬる義と刃と勇心壯士の改刃若若
 屋の感涙油と浸とどろり適微妙と大人の使勇若いふや
 若自村松との消息ふ心身と俺們は死にぞへて一面の更を
 同心一致の足成の像とゆりのくと涙とほし言葉も今の死
 念と成しぞ忠しうま小町人ふらぬるまとも村松の

亦是信が知己なるよ友涯小為くば豈丈又魂ありとまま
 ん中後ともその表と送らんいれおくくして妙なるぬ澤ぬ
 ば大人は逃へて香真の落後とを各人備ふり復徳言の奉
 あが備が牙小極いし緊要い力と弱とであるべとや大人潜
 小遠とんは幾く那里の時宜小強りあくと智情ひまどかくれ
 るく面は影と赤んと音新小文と鉄びと速と度と起在兵湯
 の征装とる火垂の準備よまも便家小返て白紙と小祝
 封ぢり香真と携へ奉りて安れなぐくと遮替と収受情よ
 納めて出り村松の若六と小伴て又至に送へ急とけり
 徳く先給の村松が家より一に清三所茂樹も急使の
 凶計小狗彦と建那足也



おと古実作

おさえ



光朝

莊兵衛
 村松が遺孤
 を
 助け
 復讐乃緯坂
 約を

清三郎

とわく親きより飛ゆるぞ映くわあまど如日の内に
ゆりぬぬけは長に茂樹母子の哀傷悲泣の言評もなり
多きども是等の時候小極と久しく留てふあつたむ
親戚はたお強てそそ疾茂蔭が亡骸と田下をささる
華院ふさりて葬りぬ極とさる郷人の算へ難る程まり
一伴者直淋淫が亡骸の送葬も同ド疾の得る所が遠
亦親戚へあまると門生の更なりま一郷の人多うりしと
一実ふ死後小葉あると見るといそ人の平生を知らず
り信り信り光が料り小差りど茂樹の父の仇師の寛
家悲激ある赤洒主信猶尾堅物天山双口三名とも非涂
強款とまむとて依所ふ忍棄て措ん中と拍ふ波ら情り

遺方るるれがそそ疾艾更圍て母の悲泣と慰る言次ふ己心
と夜明一寛家の踪蹟遠くもあつぬそそ間よと索て撃果さ
ん小使く胸と賜りしと心喘て清るる小悲の中もせに
い茂樹が健康と飲ぶりのうに何所へゆくと知らぬ誓と
今違く常るるも極く重ん由もあつし備も撞んらある
とも那三名の大敵と汝の本業りてまふとそそ疾て卒矣
忌辰と納りしそそ志あつらふそ間ハ極松夫人と留めまの
せそ那方さぬ小極く茂蔭とそそ疾と要るまるとそそ疾
然ふそそ疾実作と噂途け溜又這由と高量小実作の打
飲びそ小友人の権くそそ志さそそ疾と老太郎の灵魂も飲
びぬらん卒や那也方小托ませあへと憑憑つく母子主僕の子

名々の種柄が居る客殿小御等にて件の情由と送代り不況
せしめ候むと余こそと先納の打詰りて各心を安めぬ事固
き事ありて来りしにまは御是の刀自の長江新様うて以て
家又誠滞留の新獲り因り其の事都小より其の
事あが家又居んふ息由那里小来りてまは御是の
堀天山們能まで強忠完暴の奴們もまは御是の復讐の志
あつんと忍びまは御復遠里小来りて其の害と御是の
是り難より其車の覆るの後の戒とや一日も登く其の
尾屋小来りまは御彼奴們的知る所由もまは御是の
うへもまは御義使の人より介とあつんと洋ふまは御是の
其後茂樹と伴ふまは御是の東より入りて其の尾屋小来りて其の復讐の志とまは御是の

那難振亭にまは御茂樹小日毎小武藝と教へり茂樹は其
後其の務に其事の上りて其の目と其の月と累ねて其の
り余は其の年の秋九月の時候小先納の茂樹と伴ふと攝河泉
とまは御大和紀伊と歴て伊勢路より其の東海東山の諸國と竊
ひまは御後より後小御是の明正の承保十一年二月の中御是の
あは御其の茂樹と長江をせ其の遠回の先納の事
りて其の歴一備寛家の照臨と清の急に若報せん余ども清三
舟の事小御是の尾屋小来りて其の音信と其の事と其の事
托と其の御是の天遠く都の花と其の事と其の事と其の事
ゆらん後宿小月日と其の事と其の事と其の事と其の事
其の事と其の事と其の事と其の事と其の事と其の事と其の事

諸君より郡里と出く加賀國竹橋の驛なる延令寺に宿りぬ
 幸にお集の糸の 申て這里ともまむく日あづはも善徳が古郷
 なる漆小五りてまはる根陣七所がぬふ者り「小主人の郷
 士とて衣と好める性なるふや善徳が宿所とて漆く岩丸小
 位伏せり抑袂登城中の西國の世々總登國主畠山氏の封疆
 たり「ふも南村修理善平義則 畠山氏實の足利 家襲へて麾下
 のおま或の自之の勢と這出せ或を城後の極杉禪席小志と寄
 つ國勢亮氏の像を刻せまゝりまゝ加賀國の富樫女政親が果
 代の封地とて約三百餘年お傳へしに去る長亨二年僧徒
 善氏の健弘より土寇の禍發り漢土の昔希眉紅巾の賊り
 びの那白蓮社にお堂と樹し改りも似る下討上の逆亂ふ

新編の世家忽ち滅亡し國隔りて逆將叛民去と刻刺と
 分て今ふまゝく年の教既ふ九くの久きことま定まらる死
 竹決隣室お波及して城中能登も西の方へ遠們のおり
 才國とび奪略まゝく信まば加賀一國ふ今勇士と用家
 法候まゝり「後小勇根陣七所の一昨日間岩丸がぬふ廣瀬
 成瀬大川們ふ似る者もまゝくやと多方に相まつまは
 んぞと地にお者もは「種系も粗け國の光系寛家の節のつこ
 地方るるむとあひふまを張索なぐりに引べしと勇根本田
 の見もふ好意と謝して吉別とるる陣七縁とあつて徳と
 牙にすけりまゝ大人の飛縁の方へ踏んと思しおあつて中
 窟ふお牙まゝそは陸もあつてぐれど郡里の國目姉中

二字と更るまじくして言はし通稱と新十部といふ初章を
 と喚做せし重と十と字義の異まじくも音お似たり旧稱の
 字の音と傾て新ふものせしとの言を以て同活体語扱も
 種々の約して於余氏た衛門督日の刻授せる紙あつて
 遠里郡里寛のつ、終ふは古た金吾義系の城下に宿りけ
 るが於余氏世々の國禁うて他國の浮浪人と留めど一所
 二夜の間とも許さぬは力なきうちささく若狭より北道
 へと往く都ふやどかく入ふなり

繪本復讐言英雄録四編卷之五終

